

## 淵脇 次男／淵脇 佳子



奈良県

2019年4月15日午後5時50分頃、「子どもが溺れている！助けて！」という女性の声を自宅の1階で聞いた佳子さんが自宅前の池を見に行くと、子ども（男児7歳）が溺れていた。佳子さんはすぐに引き返し、2階にいた次男さんに助けを求めた。

次男さんが池に向かうと、子どもは沈んで見えなくなっていたため、高さ1.3mの柵を乗り越え、そのまま池に飛び込んだ。水は濁っていて子どもがどこにいるのかわからなかったが、周囲で見ていた人の声を頼りに手探りで池の中を探し、子どもを発見。そのまま抱きかかえ水面から1.3m離れている縁まで抱え上げて、柵を乗り越え池の縁で待っていた佳子さんに子どもを引き上げてもらった。そのまま子どもを抱えて自宅へ戻り、ショックのあまり声も出ずガタガタ震えている子どもを毛布等でくるみ、救急車が来るまで温め抱きかかえていた。救急搬送された後、子どもは肺気腫と発熱を患い数日入院したが、無事に回復し元の生活に戻っている。

(推薦者：公益財団法人警察協会)

この度は、人命救助による警察署からの感謝状に始まり、社会貢献者表彰という名誉ある表彰を頂く事になり、大変光栄な事と、御礼申し上げます。

思い起こせば、昨年の4月、妻が夕食の支度をしている時、通りすがりの女性の声を聞きつけ、外に出ると顔まで水に浸かり、手足をばたつかせている子どもの姿が見えたそうです。

「子どもが溺れている」との妻の知らせで見に行った時には、子どもの姿は見え、池を囲う柵を乗り越え、思わず池に飛び込んだのですが、子どもを手探りで捜し当て、どうにか抱きかかえ、妻にバトンタッチをしました。妻は私に声をかけると同時に119番通報しており、毛布にくるみ、救急車の到着を待ちましたが、随分長く感じられたものです。放心状態の子どもさんは、大きな怪我もなく幸いでしたが、一時的なショックで発熱と話が出来ない状態が続いたそうです。その後、水を飲むことが出来る様になり、無事に退院され、学校にも通えるようになったと聞き、心から安堵したものです。今回の事は無我夢中でした事ですが、気が付いたらそういう行動をとっておりました。後に、水深約2mと聞きましたが、家の前のため池でしたので、飛び込めたのだと思います。これが、どこか他の通りすがりの所なら、同じ行動がとれたか疑問ですが、たまたま家にいた時間という偶然も重なった事だと感じます。



子どもというのは未来あるかけがえのない存在です。ある小説の一節に、「子どもは太陽だ。子どもたちが輝いている限り、そこに未来は必ず訪れる」とありました。そういう未来である事を祈るばかりです。今回の表彰を受けるにあたり、新型コロナウイルス感染症の猛威と水害等で苦しまれた方々が大勢おられます。こういう時こそ、今回頂いた社会貢献者表彰の意味がある事を痛切に感じております。

この様に晴れがましい式典に出席出来る事など、2度とない事と思い、私たち夫婦、誠に有り難い事だったのですが、出席を辞退させて頂きました。これからの余りの人生において、この表彰は私共の励みとなり、重ねて御礼申し上げます。

このコロナ禍が終息をむかえ、日常の生活に戻ります事を願い、今後も精進してまいります。誠にありがとうございました。

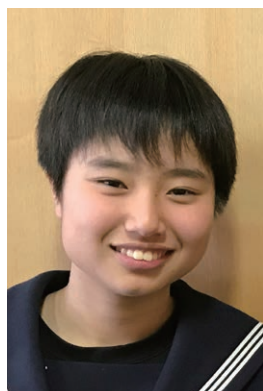


▲柏手池（自宅前の池）



▲柏手池

## 藤島 海琴／草野 寧彩／本田 悠



### 福岡県

福岡の神湊から7キロ、世界遺産沖ノ島と関連遺産群の大島に暮らしバレーボール部に所属する3人は、2019年8月31日の16時30分頃、1年ぶりに大島で行われた合同練習を終えてフェリーで帰る他校生を見送った。その直後「子どもが溺れた!」という声を聴き、波止場の先端の灯台に3人で駆け付けると、茫然とする父親と小さな男児、海には溺れている女兒の姿を見つけた。バレー部副キャプテンの藤島海琴さんは、足の速い草野寧彩さんに部活帰りの荷物からペットボトルを持ってくると、フェリー乗り場への連絡を、本田悠さんには動揺している男児に付添うように指示。さらに藤島さんはパニックになっている父親に救助させるのは危険と判断し、「私が飛び込むので、助け上げて」と伝えて海に飛び込んだ。溺れている女兒にペットボトルを抱えさせ「これを持っていればお父さんの所に帰れるからね」と声を掛け、女兒を抱えて50m程の距離を泳ぎ無事救出した。藤島さんの冷静な判断と3人の連携プレーが女兒の命を救った。

8月31日。あの日はこの季節にしては涼しい気候でした。

私たち3人は、合同チームメイトたちを16時20分発のフェリーで見送るために、波止場の赤灯台のところまで行きました。大きく手を振って見送った後、3人で談笑しながら帰路につこうとしました。大分進んだところで男の人の声がしました。最初はうまく聞きとれず、耳をすませました。本田さんと私は二度目も聞きとれませんでした。草野さんは聞き取りました。「人が落ちたっていいよる」草野さんの声を聞き、3人でもう一度もといたところに戻りました。記憶の中では、親子3人がそこで釣りをしていました。しかし駆け付けると、父親と小さな男の子の2人しかいません。海を見ると女の子が溺れています。私はどうすれば最善かを考え、草野さんにペットボトルを持ってくるように、本田さんには親子に付き添うよう伝えてペットボトルを受けとったあと、海に入りました。その間、草野さんはターミナルまで人を呼びに走り、本田さんは上から指示をしてくれました。

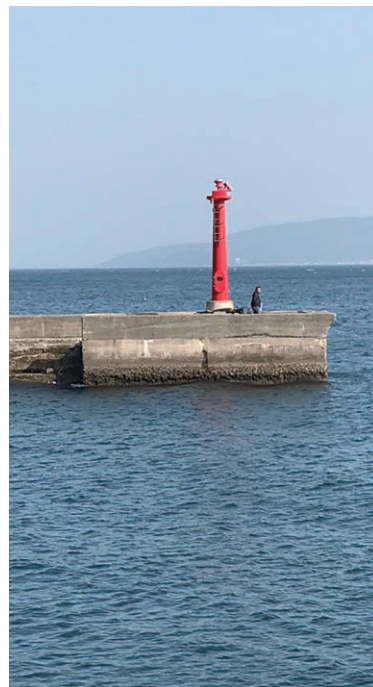
あの場に3人いてよかったと今でも思います。少しでも判断が遅ければ取り返しがつかなかったと思います。女兒の安全を常に考え、慎重に行動したあの日は、3人とも疲れて家に帰るとすぐに眠ってしまいました。

海は美しく、楽しい場所です。だからこそここで命を落としてしまう人が一人でも少なくなることを私たちは願います。

藤島 海琴



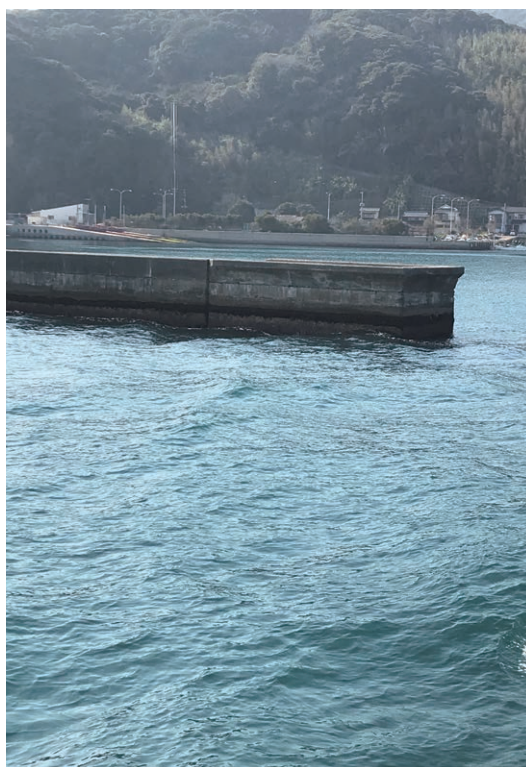
▲大島の浜



▲燈台



▲フェリー乗り場



▲救助場所

# 浅口市寄島町アッケシソウを守る会



会 長  
花房 泰志

岡山県

本州唯一の自生地であり浅口市天然記念物に指定されている「アッケシソウ」の保護のため、自生地および周辺の清掃と環境整備を行っている。アッケシソウは別名サンゴソウと呼ばれる塩湿地に生息する一年草の植物であり、環境省のレッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類に指定されている。毎年秋には見事な真紅の美しい群落が広がり、県内外から多くの人が訪れる。浅口市寄島町の寄島干拓地で2003年にアッケシソウが初めて確認され、地域住民が中心となって、この守る会が発足され保護されてきた。

アッケシソウは異常気象の影響を受けやすく、2010年の異常気象により発生した毒性ラン藻類の浸食による大量枯死や、2013年に日本で初めて確認されたヨリシマアッケシソウキバガの幼虫による食害など、甚大な被害もたらされる苦難もあったが、土壌整備や、生育条件の研究、清掃などの本会や地域住民の地道な保護活動の甲斐あって、自生地は当初460㎡であったが現在では2,500㎡と5倍以上にも拡大している。近年では、地元小学校への出前講座や、小中高校や地元企業のボランティアを募り、草刈り清掃を実施し、瀬戸内海が育ててきたアッケシソウを貴重な文化財として次世代に継承し、子どもたちの郷土愛を育てている。

(推薦者：浅口市教育委員会 教育長 中野 留美)

## 1. はじめに

この度は、社会貢献支援財団からの栄えある表彰を賜り、アッケシソウを守る会一同感激し、今後の活動への元気と展望を賜りまして誠に有り難うございました。会員一同心からの御礼を申し上げます。つきましては、表彰式と祝賀会への折角のご招待を頂きながら、欠席のご無礼のほどをどうぞお許し下さいませ。

## 2. アッケシソウについて

アッケシソウは、1891年に北海道厚岸町の牡蠣島で発見され、その町名をとってアッケシソウと命名。和名をサンゴソウ・ヤチサンゴ等と呼ばれている。ヒユ科アッケシソウ属の塩湿地に生育する1年草の植物で、葉は肉質で鱗片状に退化した枝に9月上旬白い小さな花をつける。秋10月中旬全体が緑から深紅に紅葉し、晩秋11月に実を結んで枯れ、翌年2・3月の早春に発芽する。

アッケシソウは地球の北半球に分布し、浅口市が本州唯一の自生地であり、絶滅危惧Ⅱ類に指定されている貴重な植物である。

## 3. 守る会の歴史と活動

浅口市寄島町の干拓地内に、アッケシソウの群生地が発見されたのは今から17年前の2003年11月であった。翌年寄島町の天然記念物に指定され、同時に「アッケシソウを守る会」を結成し保護活動を開始し今日に至る。2006年、浅口市の天然記念物に指定される。2009年、「岡山景観百選」に選ばれ、以後多くの表彰を受ける。また、守る会設立5周年に記念誌『寄島のアッケシソウ』を発刊した。

守る会の活動内容は、まず第1にアッケシソウの保護育成である。成育を阻害する周辺に繁茂する葎や雑草の年3回（5月・6月・9月）の草刈活動。守る会の作業会員も高齢化し、草刈に難渋していたが、市内高校のスポーツ部の生徒、市内スポーツ

少年団、町内小中学校の児童生徒。さらには浅口清掃センターのボランティアの皆さんたちに支えられ、元気に活動を展開している。

9月初旬の「緑のアッケシソウを楽しむ会」開催。10月中旬、緑のアッケシソウが紅葉し、美しい紅の絨毯となる景観を觀賞してもらうために「アッケシソウ祭」を開催し、県内外からの多くの見学者が訪れる。

近年、郷土の宝物アッケシソウへの児童生徒の興味関心が高まり、1年を通しての研究発表をする地元小学校5年生、高校では「絶滅危惧種アッケシソウの発芽について」の研究発表で、県大会で優秀賞を受賞した町内の生徒等から、未来への展望を強く感じている。

#### 4. おわりに

以上「アッケシソウを守る会」の活動の概略であります。現在心配なことは年々高まる地球の温暖化であります。北海道と比べ浅口市寄島町のアッケシソウが、このような悪条件にどのように耐えぬいて、次代に堅実に伝えられるかが大きな課題であります。

そのような時、貴財団からのこの度の温かい激励の表彰は、私ども守る会にとってこの上ない元気と勇気を下さいました。重ねて守る会一同心からの御礼を申し上げます。

会長 花房 泰志



▲R2.2.1アッケシソウを食害する蛾の卵の確認



▲R1.5.25アッケシソウ自生地草刈に駆けつけてくれた、地元高校サッカー部の方々



▲R1.10.14アッケシソウ紅葉時期に開催した「アッケシソウまつり」でのガイドの様子



▲R1.9.14アッケシソウ開花時期に行われた「緑のアッケシソウを楽しむ会」でのガイドの様子



▲R1.5.25アッケシソウ自生地草刈に駆けつけてくれた、地元の清掃会社の方々

# 京都府立綾部高等学校 由良川キャンパス 分析化学部



校長  
岸田 敏明

京都府

京都府立綾部高等学校東分校（由良川キャンパス）は、農薬科・園芸科・農芸化学科の専門学科が設置されている。校舎は由良川沿いに位置している。由良川はサケが遡上する最南端の大河であり、またアユが生息する100選に数えられる1級河川。課外活動で分析化学部の生徒たちは、川の素晴らしさと河川敷周辺のゴミ等の問題を多くの人に伝えるため、2009年から化学的水質検査、環境指標生物による生物的水質調査を行い、環境保全のため定期的な清掃活動、ゴミの調査などを実施している。

環境問題への意識を高めてもらうために、地元小中学校や保育園への環境出前授業を行っている。印象的な授業になるように「環境戦隊由良川レンジャー」として衣装を身にまとい児童参加型の環境劇を実施。河川敷のゴミは生徒たちでゴミ拾い等をしているが、年に一度市民に呼びかけての清掃活動「由良川クリーン作戦」を実施している。京都環境フェスティバル等地域での発表の場を利用し啓発活動にも取り組み、SDGsの「海の豊かさを守ろう」の達成を目指し、河川と海洋の保全に取り組んでいる。

（推薦者：京都府教育庁指導部高校教育課）

この度は、この様な名誉ある賞をいただき、喜びと感謝の気持ちで一杯です。受賞におきましては、活動に御協力いただいた多くの関係者や、皆様の温かな励ましのおかげと考えております。本当にありがとうございました。この受賞を励みに、今後さらに活動が発展していくよう、生徒共々取り組んでいきます。

さて、綾部高等学校由良川キャンパスは、京都府の中央北寄りに位置する田園都市、その中に流れる由良川沿いに位置しています。由良川は、流路延長146km、流域面積1,880km<sup>2</sup>を有し、日本海若狭湾へ注ぐ大変美しい河川です。サケが遡上する最南端の大河として、アユが生息する百河川として名が知られています。校舎からは壮大な景色が展望でき、川の流れるせせらぎは安らぎと憩いを与え、由良川が好きになる生徒も多くいます。

私が綾部高等学校に赴任してきたのは11年前、真っ先に目に入ったのは由良川でした。

幼少の頃、毎日のように魚採りに明け暮れていた私にはとても魅力的であり、またその迫力ある姿に圧倒されたことを思い出します。「この恵まれた立地条件を活かして取組がしたい。」と当時の受け持ちクラスで呼びかけ活動し始めたのが、本取組を始めるきっかけでした。その生徒らは分析化学部に所属し、クラブ活動として継続的な活動が可能となりました。

活動内容は、水質調査、水生生物調査、河川の清掃活動の他、出前授業、展示・発表などの啓発活動です。由良川の水質は良く最近ではコウノトリが巣営するなど、生態系豊かな河川です。一方、不法投棄などのゴミ問題、外来生物問題、地球温暖化や

異常気象による劣悪な環境など、多くの課題も発生しています。由良川クリーン作戦は、その打開策の一つとして取り組んでいます。2013年、25名の参加から始まったクリーン作戦も、昨年度の第7回目には230名の皆様に御協力いただきました。様々な立場の方に御参加いただき、産学官民の連携の絆が生まれ、地域一体となったこの活動は是非今後も続けていって欲しいと考えています。

高度情報化社会となった今日、様々なものがデジタル化し、ゲームやスマートフォン内の非現実的な世界に自分の居場所や他者とのつながりを感じる若者が多くいます。そのような時代だからこそ、自然を五感で感じ、視野を広げ他者を思いやることが大切だと考えます。

由良川での活動によって、生徒らの成長も感じられるようになってきました。今後も、「心」も「生態系」も豊かになることを願い活動を続けていきたいです。

顧問 近本 大作



▲イベントで由良川の流木や砂を使った鉛筆立てやサンドグラス作り



▲河川でのゴミ拾い



▲市民参加型清掃活動「第7回由良川クリーン作戦」



▲出前授業での水性生物顕微鏡観察



▲出前授業に登場「環境戦隊 由良川レンジャー」



▲定期的な水質調査



# ながさきホタルの会



事務局長  
小川 保徳

長崎県

1982年長崎では河川の氾濫による大水害がもたらされ、護岸の強化工事などによりホタルや魚などの生育域の多くが失われた。こうした中、ホタルの保護観察を通して人と自然が共生できる自然環境を作ろうと、自治体や市民の環境活動団体等のネットワーク構築のため、平成10年「ながさきホタルの会」が発足した。ホタルの生息環境の保全や水環境を考えることで、地域の生態系や自然環境保護に寄与することを目的に活動している。

主な活動としては、小中学校の総合学習等で出前講座を行い、ホタルの生態・習性、保護について学んだり、全国ホタル研究大会、親子環境教室、川の生き物観察会の開催、こども自然サミットなどのイベントを実施し、人と自然がふれあい、ホタルだけでなく生命の尊さや、自然環境、生態系を守ることの大切さを教えている。ホタル飼育を一から学び、遺伝子のかく乱が起きないように生息地ごとの個体数の増加にも努めている。環境の美化のための清掃活動にも取り組み、きれいな川を取り戻し、その地域に合った自然環境づくりを進められるよう活動している。

(推薦者：長崎市長 田上 富久)

この度は大変名誉ある賞を賜り、身に余る光栄に存じております。ご推薦・ご選出して下さった関係者の皆様に心から感謝申し上げます。本受賞は当会が地道に活動に取り組んできたことが評価されたものと推測いたしております。

従来、他都市においては合成洗剤や強い農薬の散布等による河川環境の悪化によりホタルをはじめとする水生生物の棲める環境が失われたことにもない各地では自然環境の保護・保全のための活動が活発に行われていました。長崎市では他都市の状況とは幾分異なり1982年（昭和57）年7月23日の未曾有の長崎大水害が大きな引き金となり今日の事業活動に至っています。また、本会の設立のきっかけとなったのは、当時、行政は一団体の協力を基に1986年（昭和61年度）から「ホタルの里づくり事業」に着手し、生息地の保全やゲンジボタル幼虫の飼育・放流に取り組んでいました。しかし、行政主導は否めず市内ネットワークもまったく整備される状況には至っていませんでしたが、全国各地の取り組み状況が進んでいたことも幸いし、市内の其々の地域において独自の活動を展開していた自治会や小学校ホタルの会、市民環境活動団体等と一緒に、1998年（平成10年）2月にようやく市内ネットワークを構築し、「ながさきホタルの会」を発足させることができました。本設立を契機に各地で活動を行う団体との情報共有がスムーズに行われるようになりました。

本会の主な活動としましては、設立当初から毎年、定期的実施している2か月に1回の河川清掃美化活動をはじめ出前講座（座学、フィールド）やイベントによるブース出展等に取り組んでいます。また、長崎市が平成3年度から毎年、実施しているホタル飛翔調査を平成12年度からは、「ながさきホタルの会」と官民協働による全市的

な調査（37河川82地点）として実施し、その調査結果は長崎市ホタルマップや市の施策等に活用が図られているところです。近年では、新たな取り組み事例としてライオンズクラブとの協働による河川清掃を実施するとともに継続した活動に発展することを期待しています。

今回は折角の機会を得ながら受賞式には参加することができませんでしたが、今後も本受賞を励みとして会員一同、人と自然が共生できる環境づくりにより一層精進してまいり所存でございます。本当に今回はありがとうございました。

事務局長 小川 保徳



▲子ども自然サミット（発表風景）



▲エコライフフェスタブース出展（いきものゾーン） 蛭



▲河川美化活動（ライオンズクラブとの協働作業）



▲河川美化活動（事業所等協働）



▲会員研修会（河川見学）



▲川の生きもの観察会

# 株式会社豊生



取締役  
山本 晃二

## 広島県

矯正施設を出所した人たちの就労を支援する求人誌「NEXT」を発行する株式会社豊生は、2012年に松江刑務所を出所し、就職先に困っている中、広島県尾道市の建設会社社長に雇用してもらい、慣れない中必死で働いた後、建設足場業の会社を起業した山本晃さんによって2015年に設立された。元受刑者で保護観察終了後に職に就いた人の再犯率は7.5%、反対に職に就いていない人の再犯率は72%といわれる。

「NEXT」を発行するきっかけは、当時現場作業をしていた山本さんが、社長から「足場工事の人員を連れてきてもらいたい」と営業職を任されたこと。人脈もない広島県でどうしたらいいか考えていたときに、自身が就労に苦勞した経験から、受刑者に声をかけてみようと思ひ、地域の保護司、協力してくれる雇用主、広島県就労支援事業者機構などにコンタクトを取り、必要な事について調べを進めた。最初は依頼された人員確保が中心だったが、数多くの受刑者とやり取りする中で、足場や建設業以外の仕事を望む人も大勢いることを知り、広く就労支援ができる活動をしたいと、全国的に求人誌を発行する事業も開始した。

この度は弊社の事業活動内容である、『社会復帰応援求人誌 NEXT』につきまして、大変榮譽ある賞を受賞させて頂きまして、本当にありがとうございました。心より御礼申し上げます。

元を辿れば、2015年に自社の本業である建設業の人材確保の為に始めたこの受刑者の方々に向けた就労支援ですが、様々な方々と出会い、自社でも雇用させて頂く機会が増えていくにつれて社会問題にもなっている再犯率の事や受刑者の方だけに留まらず、社会の様々な偏見の中で、頼る場所も人も居ない中でそれでも社会復帰をして行かなくてはならないという方々が沢山いらっしゃる現実に目が行くようになりました。

恥ずかしながら私自身も過去に2度、合計で7年間の服役を経験している『元受刑者』です。こうした事実を正直に言うとな受け入れがたい人には不快な想いにさせてしまうのが大変申し訳なく、非常にもどかしい思ひですが、変えることが出来ない過去に人はこだわります。

刑務所を出所後約8年の時間が経ちましたが、現在、25人程の仲間たちと一緒に何とか社会人の一員として一生懸命に仕事をして生活し、家族と笑い合い、お客様にも今をそしてこれからを見て頂き評価をして貰えるこの全ては『環境』が起因する所が大きいと感じます。

思い返せば私は今まで本当に沢山の周りの人に恵まれて助けて貰って来ました。

その当時は自分の事だけしか考えられず、心の余裕も無く、お金も全くありませんでした。

しかし、現在当時に比べて少しばかりの心のゆとりが出来たのなら、当時私に声を掛けてくれた方々のように今度は自分が今、目の前で困っている人に出来る限りの

手助けをするのは、人様に施しを受けてきた人間として当然のことだと考えてこの『社会復帰応援求人誌 NEXT』の活動をしております。

現在は様々な協力団体様のお力添えを頂きながら、求人の事業も拡大してきておりますが、昨年度からは法務省の就労支援アドバイザーにも任命して頂き、活動の幅も広がって来ております。

今後もより一層の努力をして、環境さえ用意できれば変われる方々の社会復帰に向けて社会への恩返しとしてこの活動を続けて参りたいと思います。

この度は本当にありがとうございました。

取締役 山本 晃二



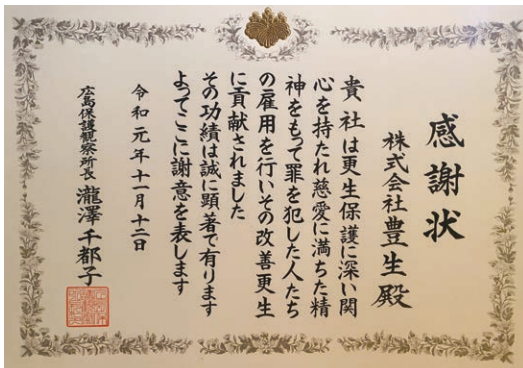
▲山本さんの出所後 受け入れてくれた社長（左）



▲NEXT1月号



▲講演会の様子



▲更生保護広島大会 表彰状



▲更生保護広島大会 表彰式

# 更生保護法人熊本自営会



理事長  
黒木 康之

熊本県

全国103の更生施設が存在する中で大正2年に熊本県で初めて設立された更生保護施設。その後県内では5つの同様の団体が設立されたが、現在で唯一残っている。身元引受人がいない元受刑者や、刑の執行猶予処分、少年院を仮退院した人等に対し、自活できるまでの平均3か月ほどの期間、食事や部屋を提供し、仕事や住居を探す間の生活を保護する。また、入所者は滞在中にアパートを借りる為に必要な費用約30万円を、ここで生活し就労する事で貯蓄することができる。就職の際は協力する雇用主の会があり、長年に亘り信頼関係を築いている。それぞれの更生に向けたプログラムもあり、薬物依存で再犯が多い人は、薬物依存のリハビリにこの施設からダルクに通うこともできる。無期刑や長期刑により、長い間実社会から隔絶されて拘束生活を送ってきた人が、円滑に社会復帰できるように特別なプログラムを行う中間処遇施設として指定されている。また、地域の理解を得る為に、定期的に近隣の清掃や地域行事への参加を積極的に行っている。

(推薦者：全国更生保護法人連盟)

熊本自営会は、大正2年3月、当時の熊本監獄典獄（現在の刑務所長）が発起人となり、刑務所、裁判所検事局の職員及び民間篤志家によって、「熊本自営協会」の名のもとに刑務所出所者等の一時保護事業を開始し、昭和27年に法務大臣の認可を得て「財団法人 熊本自営会」、平成8年には更生保護事業法の施行に伴い「更生保護法人 熊本自営会」として組織変更され、現在に至っています。

収容定員は男性20人（うち2人の少年枠あり）。親族等の身元引受人がいない、刑務所からの仮釈放者を中心に満期釈放者、執行猶予者、少年院仮退院者、保護観察中の少年、労役場出場者などを国（保護観察所）からの委託に基づいて受け入れ、部屋や食事を提供し、協力雇用主の許で就労させるなどして、自立のための貯蓄に励ませるよう援助しています。

最近の年間収容率と収容実人員は、令和元年度97.4%（103人）、平成30年度98.8%（107人）、平成29年度95.4%（96人）と高い水準で推移しており、全国103の更生保護施設の中でも10指に入る収容率を維持しています。

「情を尽くして筋を通す」、これは当会の処遇における基本理念です。犯罪や非行に陥った人の経歴等を見ると、その不遇な家庭環境等に同情を禁じ得ないこともありますが、だからといって犯罪や非行が許される訳ではなく、いずれは自分の力で生きていくことが必要です。ただし、刑事施設を出て、誰からの援助もなく自立することは難しいので、ここに社会への「HALF WAY HOUSE」（中間施設）としての更生保護施設の役割があります。本人達が抱える問題は人それぞれですが、個別処遇、集団処遇、各種プログラム等の実施を通じて、認識の変容を図り、二度と犯罪や非行に手を染めないよう、指導や助言を行っています。

今回、このような熊本自営会の活動をお認めいただき、「社会貢献者表彰」という栄えある賞をいただきましたことは、当会の役職員一同の誇りとするところであります。また、当会を推薦いただきました全国更生保護法人連盟のご配慮にも深く感謝を申し上げます。

さらに、今回の授賞式では、色々な方々がそれぞれのお立場で正に「世のため、人のため」にご尽力されているお姿を知ることができましたが、これは、私共としても大きな励みになりました。この賞の名に恥じないよう、今後も精進して参ります。ありがとうございました。

施設長 岩崎 健朗



▲2019年9月8日 SST生活集会



▲2019年10月27日 一日バス旅行



▲2019年12月15日 近隣の公園清掃奉仕



▲2019年12月22日 ふれあい餅つき



▲2020年2月9日 男の料理教室（更生保護女性会指導）

# NPO 法人サン・ワールド・ビジョン



理事長  
山野 一義

大阪府

大阪市で株式会社を運営する山野一義さんは会社の収益から毎年数百万の寄附を日本赤十字社やユニセフを通じて行っていたが、ネパールの支援を行っている人と知り合ったことで、2007年に自ら直接支援を行うと同年にサン・ワールド・ビジョンを設立した。

毎年約2千万円の支援をしている。その結果、ネパールに4校、カンボジアに2校の小学校、ブルキナファソに5校の小学校建設とポンプ式深井戸12基を設置している。建設前に現地を確認し、落成式にも参加する。学校運営は現地の人や、協力してくれるNPO団体と行っている。日本国内においては、災害等が起きた地域に対して寄付を行っている。

(推薦者：認定NPO法人日本ブルキナファソ友好協会)

この度は、NPO法人サン・ワールド・ビジョンに栄えある社会貢献者表彰をいただき、誠にありがとうございました。そして、私共のNPO法人に対して、ご支援、ご協力いただいた関係者各位に心より感謝を申し上げます。

大阪市で「健康といい気分を提供します」という企業理念のもと、主に健康食品や家庭用治療器等を取り扱う事業に携わってきました。その中で、国際貢献ができないものかと考え、いま何が一番必要とされているかと世界中を見渡した時、未だに世界には教育の機会に恵まれない子どもたちがなんと多いことかと思ひ知らされました。私共は、子どもたちの人間性を向上させるためには、しっかりとした基礎教育が絶対に必要であると確信しています。紛争や貧困などを理由に学校教育を受けられない、教育環境に恵まれていない、そのような世界のたくさん子どもたちに貢献したいと考えました。その思いから、一人でも多くの子どもたちへの支援活動を行うため、2007年「NPO法人サン・ワールド・ビジョン」を設立いたしました。

私共は、ご賛同いただいた皆様と共に、確実に社会貢献につながる支援活動を勧め、発展途上と呼ばれる地域をはじめとし世界中に、子どもたちの夢を育み、健全な成長を見守るための教育施設を設立することを第一の目標としております。

その結果としまして、ネパールに小学校を4校、カンボジアに2校建設し、さらにブルキナファソに小学校5校とポンプ式深井戸12基を設置いたしました。

国内においては、東日本大震災で被害を受けた宮城県女川町江島の高台に、有線放送設備を寄贈したり、災害等が起きた地域に対して毎年寄付を行っています。今後もさらなる社会発展のため、一層の努力を尽くす所存でございます。

末筆ではございますが、公益財団法人社会貢献支援財団の益々のご発展とご活躍を

お祈り申し上げて、お礼の言葉とさせていただきます。

この度は、本当にありがとうございました。

理事長 山野 一義



▲2009年 ネパール ナモ・ブッダ小学校 設立



▲2017年 アフリカ ブルギナファン マルー小学校設立並びに井戸寄贈



▲2010年 カンボジア コンボンステイ小学校 設立



▲2019年 ネパール シバラヤ小学校 設立



▲2019年 アフリカ ブルギナファン ニンガレ小学校 設立



## 西垣 敬子



宝塚・アフガニスタン友好協会 代表

兵庫県

1993年夏、偶然に見たアフガニスタンへのソ連軍侵攻の写真展で、生々しい戦場の光景に衝撃を受けたことが運命的な出会いとなり、1994年1月に「宝塚・アフガニスタン友好協会」を結成。日本で講演会や写真展、バザールなどのイベントで資金集めをしては、アフガニスタンで①内戦中の赤ちゃんのミルク代支援、②子どもの学校用の大型テントの調達③難民テントで生活する女性たちや収入のない母子家庭のために、日本からミシン購入代金を調達して洋裁や刺しゅうを教え、完成品を買い取って日本で売る、④爆撃で足を失った子どもに義足をプレゼント、⑤タリバーンが女性への教育を禁じたため、隠れ学校の存在があったが、そこで教える教師への給料の支援を行う、⑥女子学生の寄宿舎を建設するために4年がかりで資金集めを行うなど、数多くの献身的な支援を行ってきた。

普通の主婦だった女性が危険も顧みずにこれまでの26年間で40回以上も現地を訪れ、「アフガンを第2の故郷」と思うまで心を寄せ、現地の人たちも彼女の訪問を心待ちにしている。現在は治安の悪化から現地入りが困難だが、今後も日本にいてできる限りの支援を行い、渡航できるように現地の土を踏むつもりだという。

(推薦者：瀧谷 昇)

第54回社会貢献者表彰式典にお招きを賜りまして誠に有り難うございました。前日の懇談会では、いくつかの団体の活動紹介の映像を拝見して、心打たれました。

1994年、59歳で始めたアフガニスタン支援は、一介の家庭の主婦にとりまして誠に厳しいものでありました。生活も文化も宗教も全く異なる国に何の経験もない私は飛び込みました。途方に暮れる様な出来事ばかり起きました。

しかし私が活動をストップすることなく続けることが出来ましたのは、やはり、そこで出会った人々との出会いが素敵だったからです。貧しくても誇りを失わず、親を大切に、長老を敬い、とくに母親を大切に、家族を愛する。女性は一人で外を歩けず、顔を覆う衣装をまとして男性の家族と出かける。夜は危険で絶対に外は歩けない。そんな国に生きる人々ですが、時には日本の何不自由なく暮らしている人たちよりずっと幸せそうに見えました。

私は帰るとすぐに現地での様子を写真で紹介、支援金を募りました。毎年支援金を懐に現地へ向かいました。国内避難民キャンプで戦争未亡人たちへ30台のミシンを贈ってテントの洋裁教室や刺繍教室を開きました。タリバーン時代には髭だらけのタリバーンが町中を歩き、女性は学校へ行くことも、仕事に行くことも禁じられました。規律に反すると、町中で公開処刑が行われました。それでも私は毎年2回以上この国に出かけました。私が60歳を超えていることで、タリバーンは彼らの母親より年上の私を丁重に扱ってくれたのです。

そしてあの9.11の同時多発テロでアメリカの空爆を受け、タリバーン政権は崩壊、

20数年振りにアフガニスタンに平和が訪れました。5年間の空白を経て女子は学校に戻り、女性教師も職場に戻りました。隣国に逃げていた数百万人の難民も戻って来ました。

私は大学に女子トイレや女子寮を建設。12年以上経った今でも新学期になると「今年も女子寮満杯」と報告がインターネットで届きます。この国は教育費が全て無料なのですが大学まで行く女子はほんの僅かです。

政府やその他の公的な寄付は一切頂かず、純粋に女性団体や一般の人たちからの寄付で賄いました。これは私の誇りでもあります。

現在、アフガン国内にはタリバーンが復活、そこへISも加わってテロが頻発し、危険で入れません。コロナ禍が加わって人々はより苦しんでおります。

今回、この賞を頂いたことで今後も一層努力して女性支援を続ける所存でございます。

宝塚・アフガニスタン友好協会 代表 西垣 敬子



▲1995年 サルシャヒ国内避難民キャンプ テントの洋裁教室



▲1995年 サルシャヒ国内避難民キャンプ テントの洋裁教室



▲2003年 ナンガルハル大学教育学部に女子用トイレ建設



▲2007年 完成間近い女子寮の前で



▲未亡人施設に刺しゅう糸を配る ジャララバード

# 社会福祉法人地蔵会



理事長  
大野 待子



施設長  
奥野 満

## 千葉県

25年前に現理事長の大野待子さんと施設長を務める奥野満さんが始めた社会福祉法人。千葉県船橋市で運営する工房「空と海」では障がいのある人とともに身体づくり、ものづくりに取り組んでいる。利用者は木工や紙漉き、針仕事などの作品の製作に励む。作品は有名百貨店で取り扱われるようになり、工房にも買い求める人が増えてきたことから、カフェを併設することとなり「らんどね」空と海のレストランを開店した。無農薬の食材を使用したメニューを提供し、利用者はスタッフとして勤務している。

次のステップとして利用者の高齢化も伴い、グループホームを2020年4月に開設。

## 「紙漉き工房空と海の活動について」

商品としてデパートで売れる作品を創ろう、キャンプや水泳、カヌー、登山にも挑戦し身体を鍛えよう。そんなコンセプトのもと25年前、船橋市に小さな作業所を開設したが、周囲から無理だと言われた。ところが4人の知的障がいのある人たちと古い紙漉きの技術を活かした製法で大きな和紙タペストリーを作品にして地元のデパートで販売したところ、大好評で驚くべき売り上げ成績が続いた。勢いは瞬間に全国に広がり「空と海」の企画展が毎月開催されるようになり利用者と紙工芸品を連日製作するようになった。販売のため20年以上店頭に立つが、障がい者が作りましたとは言わないようにしている。

現在、利用者数は70人になり、毎日元気に出かけて来て木工、機織り、刺し子。紙漉き、レストランでの調理助手、菓子づくり、接客などの仕事に励んでいる。その他にも陶芸、絵画を楽しみ、獅子舞や太鼓の練習をし、近所の幼稚園で披露する活動も長年続けている。アウトドアスポーツもできるだけ取り入れ、夏は水泳やカヌー、山登りやキャンプに出掛け、冬はクロスカントリースキーやスノーシューで雪原を歩き自然を満喫した後は温泉に入り仲間たちとカラオケを楽しむ。このように空と海では利用者と職員が日々ものづくりとからだづくりに励み、創設当初のコンセプトを守り続けてきた。

この度、貴財団より表彰状と副賞を賜りましたが、今回受賞された方たちや過去の受賞者のその活動内容に比べ、足元にも遠く及ばないことを恥じ恐縮する次第ですが、「空と海」設立25年の節目の本年、賞を賜りましたことを利用者、職員とともに喜びあい、更なる飛躍への足掛かりとさせていただきます。

発足当初、障がいのある人たちが作ったものがデパートで売れるなんて無理だとか、素人の浅知恵の恐ろしさを思い知らされたとその作品を評されたが、今では施設内のギャラリーや展示広場「ヒュッゲ」を多くの人たちが訪れ、レストランで働く利用者を暖かく見守りながら最高の料理を皆様に楽しんでいただけるようになった。

「空と海」では利用者の変わらぬ笑顔とその豊かな個性を、これからも支え続ける道を弛まぬ努力で切り拓き続けることで、この度の受賞への心よりの感謝としたい。

理事長 大野 待子



▲レストランでの配膳作業



▲作成した作品を販売するギャラリー



▲刺し子作業



▲獅子舞、太鼓クラブの活動



▲毎年恒例の旅行風景

# ウグナヤンの会



代表  
西村 龍雄

京都府

38年前、友人とフィリピン旅行へ行った西村龍雄さんは橋の下で物乞いをする子どもたちに心を痛み、同国で貧困ゆえに義務教育さえ受けることのできない家庭の子どもたちに、何の見返りも期待しない奉仕の精神と、「教育は貧困を救う」との信念のもと、現地の西本至神父、山本雅子氏の協力を得て2002年にウグナヤンの会を設立。学資支援を「教育里親運動」と名づけて今日に至る。スポンサーとなる会員は一对一の関係で同じ子どもを支援する。子どもたちと手紙や写真のやり取りをし、1年に1度、希望するスポンサーとフィリピンへ行き、子どもやその家族との交流会も行っている。

これまでに延べ2,800人以上の子どもたちを支援してきた。途中でドロップアウトしてしまう子、大学まで支援したがなかなか職に就けず苦労する子、就職して大成功する子などまちまちだが、身に着けた教育は力になり、教育を受けたことで貧困から脱出してみな一人前の大人になることができている。立身出世ではなく、子どもたちに少しでも明るい未来があるよう今後も支援活動は続けられる。

(推薦者：香月 武)

今回の社会貢献者表彰式典は、新型コロナウイルス蔓延、所謂コロナ禍の中での経験した事のない特殊な状況下で開催されたものでした。出入り口では消毒液、会場では全員マスク又はフェイスシールド着用、そしてテーブル座席配置もソーシャルディスタンスが考慮されており、お陰様で安心して式典に臨むことが出来ました。財団、ホテルサイドの徹底した対応に先ず心から敬意を表する次第です。

さて、私共ウグナヤンの会は、貧困ゆえに初等教育さえままならないフィリピンの子どもたちへの勉学支援の活動を有志数人でスタートさせたのは2002年の事、「貧困から脱却する最善の手だては教育である」との信念から始めたものでフィリピンの子どもの会員が一对一の関係で学資支援し、併せて文通等で心の交流を図ることも会の目的としています。ちなみに会の名前の“ウグナヤン”とは“絆”を意味するフィリピン語に由来します。2002年以来、現地で奨学生との交歓会を毎年催しており18回を数えます。延べで2,818人の子どもたちを勉学支援出来ました。

先に述べた通り初等教育への支援を目的とするものですが、中には大学を卒業して教育免許を取得し、英語教師として日本へ派遣された元奨学生が現れたり、有名な芸能人になり、連日テレビに出演している者、商船大学を卒業し日本の海運会社に就職して航海士になった者、公認会計士になり活躍している者等、勉学に励み希望を叶えた奨学生もいます。

しかしながら、私共の活動は決して立身出世ではなく、彼らの未来に明るい希望と光を投げかければと願うものです。

この様な晴れがましい御席に招かれ表彰を受けるなど元より思いもしなかった事で

す。しかし、私共のささやかな草の根の交流が評価されました事は、我がウグナヤンの会の会員にとりまして活動の大きな励みとなるでしょう。

その意味におきまして本当に有難く思っており、社会貢献支援財団には心から感謝申し上げる次第です。誠に有難うございます。

最後に、このコロナ禍の中、頑張っ  
て勉強に励んでいるのであろうフィリ  
ピン子どもたちになり代わって“あ  
りがとう”と申し上げます。

“Maraming Salamat Sa inyo! (マ  
ラミンサラマッサイニョ)

代表 西村 龍雄



▲お土産を手にする奨学生たち



▲ゲームを楽しむ奨学生



▲サバンバライでの奨学生たちとの交歓会



▲現地レストランでの交歓会



▲奨学生親子とのランチ

# 認定 NPO 法人世界の子どもにワクチンを 日本委員会



理事長  
劔持 睦子

東京都

1990年に国際連合本部で開催された「子供のための世界サミット」で、ワクチンが足りないために多くの子どもたちが命を落としていることが議論された。そして、1993年に京都で開催された「子供ワクチン世界会議」において、先進国は発展途上国の子どもたちのために必要なワクチンを供給しなければならない、という「京都宣言」が採択されたことを受け、1994年1月に細川佳代子さん（細川護熙元首相夫人）が代表となり団体を創設した。

主な活動は途上国へのワクチン支援と国内での啓発活動。日本全国の個人と法人から預かった寄付を、国際連合児童基金（UNICEF）を通じてワクチンに換え、ミャンマー、ラオス、ブータン、バヌアツの4か国（2019年実績）へ贈っている。

プロ野球福岡ソフトバンクホークスの和田毅選手は、試合で1球投げごとにワクチン10本、勝利投手になったら20本など、自身の活躍が支援につながる「僕のルール」を通じ、2005年より支援を継続、AC 広告を通じて多くの方が社会貢献に参加するきっかけとなる。これまで活動した26年間で、ワクチンで予防できる感染症で命を落とす子どもたちの数を、1日8,000人から4,000人へ半減させることに寄与した。

この度、公益財団法人 社会貢献支援財団の「社会貢献者表彰」お受けしましたことを、誠に光栄なことと心から感謝しております。

「社会的に報われる機会の少ない方を対象に表彰する」歴史ある財団とのこと。

前夜の懇親会でそれぞれの活動について伺い、助けを必要とする人々のために貴重な活動をしておられることを知りました。その方々と共に私どもの活動をお選びくださいましたことに感動いたしました。

認定 NPO 法人 世界の子どもにワクチンを 日本委員会は、1994年に細川佳代子が創設いたしました。細川が幼いころ、日本は敗戦国でありながら、欧米の先進国からワクチンや粉ミルクを贈って頂き、無事成長することがきたので、大きくなったらご恩返しをしたいと思って、当委員会を立ち上げました。1994年当時、世界でワクチンがないために5歳まで生きられない子どもたちが1日8,000人でした。

最初は資金を集めるために、使用済のテレフォンカードが海外で換金できるとのこと、全国から集めることから始めました。アジアを視察して、軍事政権下のミャンマーを支援することになりました。

そしてある日、「応援します」と福岡ソフトバンクホークスの和田毅投手ご本人から直接お電話がありました。「一球投げるごとに10本のワクチンなど、僕のルール」で子どもたちにワクチンを届けたいとお申し出でした。

その後、和田投手の「僕のルール」のおかげで活動は全国に広まり、支援国もミャンマー、ラオス、ブータン、バヌアツと常時支援国が4か国となり、緊急支援も可能となりました。

私どもの活動は、個人、企業の方々からのご寄付のほかに、使用済みの切手、書き損じはがき、ペットボトルキャップなど、創設当時の「もったいない」の精神で皆さまへご協力を呼びかけて、開発途上国の子どもたちの命のために、活動を続けております。

創設から27年目、ワクチンがないために命を落とす子どもたちは半減いたしましたが、それでも1日4,000人です。

新型コロナウイルスの世界的蔓延で感染症の脅威、ワクチンの大切さを改めて、実感する日々です。このような状況だからこそ、幼い命に影響が及ばないように、今年も昨年と同様に支援者様からお預かりしたご寄付をワクチンとワクチンを冷たいまま届けることができるコールドチェーンとして贈ることができるよう、努力してまいります。

いろいろな意味で影響を受けるのではないかと心配しておりますが、このような時期に貴財団からの受賞は誠にありがたく、強い励みとなります。

ありがとうございました。

理事長 剣持 睦子



▲バヌアツでのポリオワクチン接種



▲ブータンの学校で元気に出迎えてくれた子どもたち



▲ミャンマーでポリオワクチン接種をする細川佳代子会長



▲ラオスのワクチン接種会場に集まった親子



▲和田選手に感謝状を贈呈する細川会長



# NPO 法人チャイルドドクター・ジャパン



本部統括・理事  
宮田 久也

大阪府

2000年にNPO法人として、途上国で暮らす人々に医療支援を実施するために設立された団体。これまでに、主にケニアの貧困地域・孤児院に暮らす子どもや、障がいを持った子ども、心臓等に疾患を持った子ども、HIVに感染した子どもなど延べ10万人以上の患者に無償で医療を提供してきた。ケニアでは医師は収入の良い海外に出て行ってしまうことが多く、医療従事者が不足している。

団体の設立当初、ケニアの乳幼児の死亡率は12.1%で、1,000人中121人の子どもが5歳までに亡くなっていた。病気の子もを持つ母親に聞き取りをすると、医療費が払えない、病院への交通費がないという回答が多かったことから、現地に診療所を開設し、無償で医療サービスを提供するとともに、スラムへの患者送迎サービスを開始した結果、支援地域内の乳幼児死亡率が劇的に改善していった。しかし、現地スタッフとのトラブルが相次いだ事から、診療所や現地事務所を閉鎖し、既存の医療機関を利用し、ITを駆使して支援する活動にシフトした。ケニアの人も10人に一人はスマートフォンを持つことから、様々な決裁を携帯で行ったり、薬配送アプリを利用し、1万キロ離れた約572人の孤児や障がい者をサポートしている。具体的にはキャッシュレスで子どもたちが近隣の医療機関を受診し、その決裁を遠く日本でする。また、タクシーアプリを利用して現地のお母さん方が乗り合いでタクシーを手配し病院に行き、その費用も日本で決裁している。

このような仕組みで、日本でもケニアでも自前の事務所を構える必要もなく、警備員を雇う費用も不要になり、シェアオフィスで大幅に経費を節約。またタクシーアプリや薬配送アプリの利用により、より安価に、より良質な医療サービスの提供が可能になった。

この度は、このような栄誉ある賞を頂き、関係者一同、大変嬉しく感じております。本当にありがとうございます。また、ご支援者やボランティアの方々、国内外の全てのスタッフを始め、活動に関わって下さった全ての関係者の方々に深く感謝申し上げます。

特定非営利活動法人チャイルドドクター・ジャパンは、2000年、大阪にある医真会八尾総合病院の院長（当時）であった医師の森功が設立した国際医療支援団体です。これまで、国内外での緊急支援活動や、ケニアでの医療支援活動に20年間携わって参りました。

活動当初、ケニアの首都ナイロビにあるスラム街（貧困地域）における調査で、経済的な問題で、病院への交通費や医療費が支払えず、医療にアクセス出来ない子どもたちが沢山いることが分かりました。

そうした交通費や医療費を確保する為、日本を中心とした各国から継続的な支援を募る為、株式会社メディアライツ（佐藤順治 COO）社の無償協力を得て、「チャイルドドクターシステム」という手紙交流プログラムを構築しました。このプログラムでは、1,300人の翻訳ボランティアが、日本のご支援者とケニアの子どもたちを手紙で繋いで下さっています。今も、子どもたちの日常や医療レポートを、毎月1,000通以上、ご支援者に送り続けており、この結果、平均95%のご支援者の方々が、継続して子ど

もたちの支援を続けて下さっています。

現在では、スラム街に暮らす子どもたちに限らず、孤児院に暮らす子どもたち、HIVに感染した子どもたち、心臓病を抱え手術が必要な子どもたち、透析が必要な子どもたち、脳性麻痺でリハビリが必要な子どもたちに、医療サービスを提供しています。これまで、システムを通じて、医療へアクセス出来た子どもたちは、延べ10万人を超えました。

最近では、こうしたシステムの利用にとどまらず、各種アプリを活用した活動へと展開していています。例えば、処方箋をスマホアプリに送信することで、4時間以内に患者宅に薬剤師がバイク便で薬を届けたり、患者宅から病院への患者搬送を、タクシーアプリで実施したり、食料援助をする際、スマホアプリで現金給付したりしています。

この受賞を機に、上記システムを他団体へも提供し始めました。10年後、世界中の団体がこのシステムを利用し、多くの子どもたちが、医療や教育、給食等をプログラムを受けられる日を夢見て、活動を続けていきたいと思っています。

尚、副賞は、心臓弁置換術が必要なジュリア・ケムントちゃんの手術代に使わせて頂きたいと思っております。

本部統括・理事 宮田 久也



▲スラムでの食事風景



▲現地調査風景



▲手紙交流の様子



▲診療所風景



▲無料診察券配布

# 認定 NPO 法人 JHP・学校をつくる会

東京都



代表  
小山内 美江子

1993年から主にカンボジアでの学校建設、教育支援、ボランティア派遣、国内での啓発活動、災害救援活動を行っている。これまでに360棟の学校を建設している。建設は現地の教育局からの要請に基づき調査を実施。教室の不足、校舎の老朽化や倒壊の危険性、全学年が収容できない、校舎以外の設備が必要など、各学校が抱える状況をスタッフが直接確認し、優先度の高い学校から建設する。

校舎の建設のみならず、トイレや井戸など、衛生施設の支援も一緒に行う。その際、衛生教本を使って、教員、生徒、コミュニティの人々に衛生指導も行う。これにより清掃する習慣が付き、生徒たち自ら学校をきれいに保とうとする成果があり、保護者も安心して学校に通わせられるようになる。

同国では正式な教科として後回しにされていた美術や音楽の芸術科目を教えられるように「初等科芸術教育支援事業」を2016年に開始し、生徒用の教科書や教員用の指導書づくりが本格的に開始された。教育のバリエーションを増やし、子どもたちが音楽や美術を通して豊かな感性や心の情操を育めるよう期待される。成人の識字教育の実施や、児童養護施設「幸せのこどもの家」の設立、日本の若者のボランティア派遣などを実施している。

今回、私どもの活動をご理解下さり、社会貢献支援財団様に表彰していただいたことを大変光栄に思います。

私は、1990年の8月、イラクによるクウェートへの武力行使によって勃発した湾岸戦争に際し、ヨルダン難民キャンプに出向き、はじめての海外ボランティアを経験しました。湾岸戦争時、「顔の見えない日本人」と批難されたことが行動の原点であり、共に活動した大学生の日々の成長に感動したことが、後のカンボジアでの活動に繋がっています。その後、タイ国境の難民キャンプを視察し、更に1992年、活動の調査のため、カンボジア入りしたあと、1992年7月から学生らと共にタイからの帰還難民の救援に汗を流しました。その時の活動を通じて、学校建設の必要性を痛感し、1993年9月15日に「カンボジアのこどもに学校をつくる会」を設立しました。1997年に「JHP・学校をつくる会」に改称し現在に至ります。

私どもは、「できることからはじめよう」をモットーに、主にカンボジアとネパールで教育支援を行っております。カンボジアに359棟、ネパールでも14棟の校舎を建設寄贈して教育支援活動に取り組んで参りました。また、音楽や美術教育の発展に基本創りから大きく関わっています。2016年にカンボジアの教育省（日本の文部科学省に相当）は教育改革の一環として、「芸術教科」を新たに設けることに決めましたが、JHPは、そのための協力を依頼され、さらにこの支援活動は、JICA（国際協力機構）の草の根技術協力事業として採択され、2016年8月から5年間の本格的な活動がスタートしました。また、2018年には、新しく成人識字教育事業を開始しました。これ

までは子どもの教育支援に力を入れてまいりましたが、内戦の影響で十分な教育を受けられなかった大人たちにも教育を受ける機会を設けました。読み書きや計算の知識を得ることによって、より生産性のある職を自ら創造し、彼らの子どもを学校に通わせ、勉学意欲を促進することを期待しています。また、ボランティア派遣事業では、地球的視野を持つ日本の若者の育成にも取り組んでおります。カンボジアやネパールの子どもたちだけでなく、日本の学生の成長を見ると、明るい未来への希望を持つことができます。

JHP が25年以上に渡って活動を続けてこられたのは、たくさんの会員や支援者の方々が応援してくださり、協力してくださる大学や企業があるからです。今後も積極的に様々な支援活動を行っていきたくと考えております。新しい世代とも話し合い、より良い活動を続けてまいります。この度は、本当にありがとうございました。

代表 小山内 美江子



▲アートワークショップでお互いの作品を見せあう子どもたち



▲音楽教師育成ワークショップの様子



▲支援先学校の子どもたち



▲初等科芸術教育支援 模擬授業の様子



▲第2期 識字クラス開講式集合写真